

人間徳

2020.8.5

私が中学3年生のときである。卒業式の日、当時の校長先生が3年生の教室に来てくださって、卒業生一人一人に、直筆の色紙を手渡してくださった。私がいただいた色紙には「人間徳」と書かれてあった。

正確には覚えてはいないが、「言葉の意味がわからない人はいますか」と聞かれ、中学3年生だった私は、わからないので素直に手を挙げて質問をした。校長先生から一応説明を受けたが、わかったようなわからないような釈然としないまま終わった。

てっきり他の人も質問をするのかと思いきや誰もしないではないか。結局校長先生に質問したのは私だけだった。あの頃、不幸にも私の座席は教卓のすぐ前だった。後ろの様子、すなわち教室の様子が全く見えない、わからない場所だったのである。席がもっと後ろであれば、絶対に質問などしなかったと断言できる。暴挙に出て恥ずかしい思いをすることもなかった。

当時は、大人になればそのうちわかるだろうと高をくくっていた。だが、中学卒業後、40年経ってもいまだに釈然としないままなのである。オーバーに言えば、私はずっと「人間徳」の意味を探して生きてきたようなものである。まるで思い十字架を背負うがごとく。

あの頃、3年生は3クラスだったので、約120名の卒業生がいたことになる。生徒一人一人に120枚の色紙を書く校長先生は、そうはいないだろう。そこで問題は、あのときの校長先生は、3年生一人一人のことをそんなにわかっていただろうかということである。私の記憶では、校長先生と話したことなどない。自分から校長先生に接触を試みるような生徒ではなかった。もし、わかっていて色紙を書いてくださったのであれば、私には「徳」がない、足りないということになるのではないかと。確かに当たっている。校長先生恐るべしである。

事の真相はわからない。しかし、ときおり、なにゆえに「人間徳」なのかと考えることがある。実は、このところ、この「徳」について考えている。昔から教育では、「知育」「徳育」「体育」あるいは「知・徳・体」という言葉がある。どれが一番大切かということではなく、3つのバランスが重要である。したがって、どれも欠くことのできない要素である。

それはそうなのだが、人が生きて上では、どうも「徳」が一番重要視されるべきではないかと考えるようになった。「徳」について考えていると、どうしても中学時代の「人間徳」が出てきてしまうわけである。ということは、いまだに「人間徳」の境地に達していないと十分自覚しているということである。それにしても、やっかいな色紙である。おかげで引っ越しのたびに、じっと見つめることになり、捨てることもできずにいる。

中学のときには、こんなに長くこの言葉とつき合うことになるとは思わなかった。考えてみると、あの頃の校長先生の年齢に近づいてきた。もしかしたら、このところ「徳」について考えるようになったのは、たまたまではないのかもしれない。校長先生も「徳」について考えていたのだろうか。それで色紙に書きたいと思ったときに、たまたま私だったのだろうか。そんなことを考えたりする。

いずれにせよ、「人間徳」この言葉は、私には重すぎる。それでも中学時代の校長先生には感謝すべきなのだろうと思う。